



39-8144

目次

大... 近... 頃... あり... は... 多... の... の...
 今... 世... 人... 之... 用... あり... せ... ぬ... べ... ず...
 や... の... 同... 一... 事... なる... 世... の... あり...
 され... なる... 國... 之... 極... 其... 品... も... あり...
 たり... 高... なる... 世... 之... あり... せ... ぬ... べ... ず...
 五代の祖より此大江戸に任て國々の多は... を... つ... 世の
 ... び... せ... を... かく... 感... なる... 世... 之... あり... せ... ぬ... べ... ず...
 家... も... あり... せ... ぬ... べ... ず... 近... 年... 其... 輩... あり... 公...

あはれきりて貢物城内事とていふはの教をも定めせ給ひて
とていふことえ上ぐるよりいし侍へぬ志のなりの世よりいふ
天下此五のたをの外の外よりいふ此とて程益あるはなり
とていふこれの國ありも果を用ひぬ人かかるとして北東の
心も遠く遠く島にさかすむこといふはぬまはつてを
まして其身を盡しむるのうおありとていふ又ある國の人これ
腹もいふ方れもの志ま憂をもかくさむる徳あはつていふ
をいふもいふも年々此たありといひの業行事にこれして
おのう世小なりて公小貢物をさかすむこといふはなりといふ頃よ

序一

法許り來てやまといふはの教をも定めせ給ひて
いふはの教をも定めせ給ひて
御惠あるんといふはの教をも定めせ給ひて
かくいふていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
盤水大人のえ集るるといふ書か其故をいふは
いふは記されたりといふはの教をも定めせ給ひて
文字にいふ世のいふもいふもいふもいふもいふもいふも
思ふといふはなりといふはの教をも定めせ給ひて

其の同様の事... 此の本性... 又此葉生... 此の功... 樂の... 代... 其徳... 文化十二年三月...

目録

- 發端
- 古今形勢
- 傳來諸説
- 考證雜話
- 本朝食鑑煙艸の主治抄録
- 和蘭煙艸の功能
- 唐土吃煙主功
- 和漢煙毒を解屯方
- 禁忌
- 唐土和蘭

吃煙古式の圖

清朝人吃煙圖 同阿片を吸ふ圖

和蘭人食煙圖

印度人卷煙を吸ふ圖

奴婢は長煙管を持せる寛永中の圖

出羽の民間は得せる鐵煙管の圖

浮世又兵衛り画ける煙筒の圖 并寛永の頃の煙盆の圖

和漢煙店招牌の圖

古今利焼やつらの圖

大高子葉竹きせる法々の圖

目ざまし草

發端

萬録を我師磐水大人未だ著るゝ時和蘭の書はたゞこの始て生出る國所を見出し、即ち産地の名小して草も地名を以て世は通稱とありかく世界は弘く濫觴の的證を得給ひてより和漢傳來の事をもつて集んと志し給ひて多くの書籍ものなる此草の事をいふものをはみとく抄録して編集し給へるなりことゆへに此草功もなり又害もなき事もある給へれば人々心得おきて益ある書なりとて往年其門は遊る輩櫻木は多かりて其家は藏せしなりかくてあまを見つる人はいく免ぐあまよまをぞえひるものといふも少くはなれり其

書の真名書なれどもあんなるをあれども幼童女子又男も漢文讀な
まぬ人もあえよみよきうたれせうれてさるるをてよき書をうれく
おもよきやせうらんやうは假名文よきうてよとてよふもの多きまよ
こび大人は申て彼書のなうある草の来由ありむり功能禁忌を
よのよきて簡要なる事を抜萃し又正編を木よありし後おも
ゆり得られしをむろひのつゆおき給へる巻のなうありも其要ある事
どもを擇とりうれあきを綴合て此うな書の草紙となりてあり小目
さよし草よ名はけつるありあまし草をりけるものともあし徳と萬
葉集を始として又俊頼朝臣の 祐の森の下よこをめさまし草を
うらあれとよまれし草をよよきば祐の草をさめよものふらをりあ

此うてふもの人々つひよまひあつてもそのことをもあしざれを誠
祐のりおて物をよきまぬよ似たりきを此説をきくよ始を夢のさめ
らん心地やまらん又問をよき憂をわく効あることハ目さぬし草とい
んもふけなうしとて此巻の名よおほせつるよなん

古今形勢

たむこといふもの異國よあし傳來せよよと二百年よあまあり
久しきあらしはしとなりぬれば世の人貴賤ともは其謂をも知らざる
むらとわくくらあしきよあしなるよて今やひもこのきよあてはともいひあ
まことよ酒も茶もよまよるものよなんさよを手と口とよ離さよ志
むしとくことよあし後ハ事うらよあしけあも飽はし居あ飢はしあ

あはれを望むひきまひくもるるいもんうこなくどおぼゆる憂よ
ほけ樂しきまつけてもあまを伴はざれを悶る氣も望うべ
嬉しき心ものびざるがごとく近き世の人のをいひのやくとて
西行の秋もくもることもなき世う形とひひもさることを
うしませば此物世はひまのひくむ終まり人ごと家おとす
用あることよなりてを客人をもてなむおもまの前は是を
進むを常のなむいふことをなむむるるいもむもかこ
くれどそれのみこぼの御製とて

むらぐくひまあつ終るるあかりなきなみある人のあふとをあま
とよあせ給りたりとあまの妙法院の宮の御言葉とてたむこり

七の徳ありとのあししものを見えふを又も終る人一名を
相思草といひて人むもびあまを吸ふときを朝夕思ひあはれ
て止るもなると終るとあまをくもるもあまもきあま人の免はる
草よあまのあまもれ

傳來の諸説

當時慶長のいひごと異國人のあま往來あり頃とてめく其
種子をうゑしとを又乾くる葉を巻て管のあまをくふ一頭よ
火を熨ト一頭よりこもを吹て薫服するあま猶それより以前の
事なるをくきとを伝へし傳へし始めハ明の萬曆の頃偶あま
を服する者あり崇禎はなめくを頗る者もあまなりとなん

又韓人の著せる書ハ近歲始て倭國に出と説き張氏が書ハ
 朝鮮志を著りて見ると載るを以て考むるは亦より朝鮮は傳へ
 西洋なる人其種を中國より帶び來つるといふ説も亦れを
 彼より直に受傳へ又彼より我東方に傳へし物又西に轉
 じてありし朝鮮唐土にも傳へしと云ふ和漢大抵其時世を
 同くして都て我國を唐土と先づする歟ともおもゆる何れ
 貳百餘年來の事なりたむといふ名を世界のふり
 何れの地までも通稱となりしれども傳來のそと免る
 くの異名をよび延命草長命草の類ひハ丹波粉

吃煙古式の圖

万治寛文の頃の物語にて
 作を設ける図なり
 雑話中よ本文を
 出せ

万治年
 間印本 誹諧毛吹草よ

吾思ふ

無ひるもの

たはこ

忠爺



銚子
 鼻紙の上
 置る所

煙管の吸口を
 口につくは
 べし或人いふ

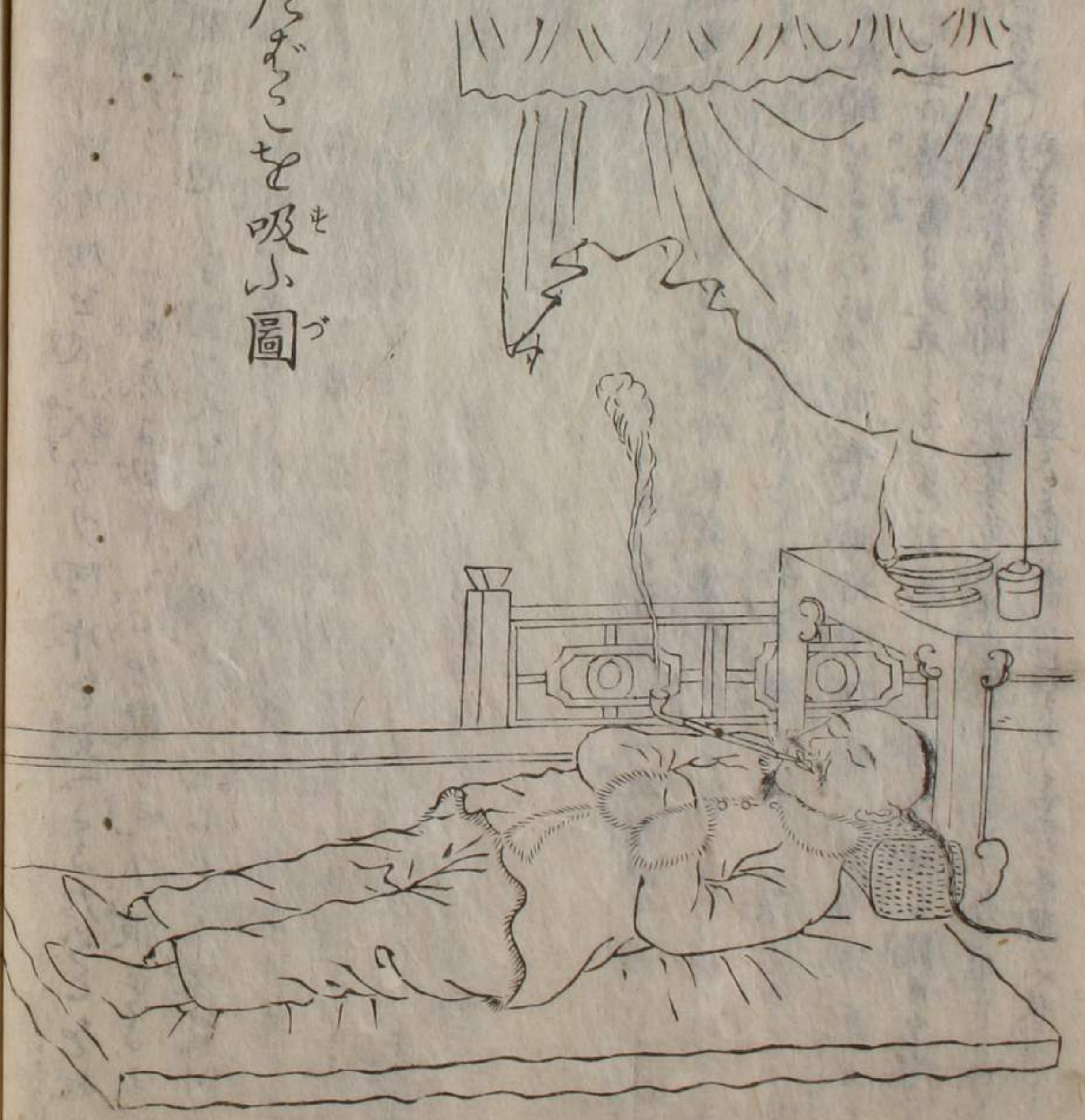
清朝人吃煙圖
竹煙管把八下官あり



左の圖ハ清高阿片煙を吸ふ状なり阿片を交へたるたぶを短烟管に盛り燈火にて吸つけ臥床に臥して心を鎮め吃ひ服するまじき一炷香の間を其廻りを圖ひ人を拂ひ開ふして二三も吸ふありこれより起き出れば睡眠を催せしむる徹夜の作業も出来るとありこれハ移長とて舟中案針の役を勤め昼夜風候方位等を辨するを主する人の所あり但一度此法を用ひ卒に止るとも其身は害ありとて上陸の後旅館に在の間を折くことを薰服せるとあり長崎の荒木氏目の所あり見しを圖して贈るあり

按ずるは印度地方にてハ阿片一味を薰服する風習あり吸ひて後暫時昏憤せしむるも服後精神爽快通夜眠を催せしむることをかくある海をちやく遠行かとも隨意にして其筆樂しむること限るありとぞ大人の紀聞せるものあり瓜哇人俗好啖阿片不至昏醉則不已と白石先生の著書に見えしものなるべし此阿片煙も彼より傳へし轉法なる也
此邊沙律陀婆閣煙藥陸地にも四分律は盛風を患煙筒を作て煙を用ふ其煙を喫て疾治せしむる見ゆ今今煙草もたは若阿片の類なるも但外の薰藥のや後の考せしむる

阿片あへんたぐたぐを吸す小圖こず



和蘭人食煙圖あらんごんとんをこをせぶつ

奴隸めつり烏鬼うき銀盆ぎんぼん唾壺つばひと手爐ていろ
とを載のて側わきまたたてり



崑崙奴象を御かぐり
 巻たむことを吸ふ圖

これハ文化癸酉の夏
 長崎一船来北象の
 写真なり



長崎荒如元画

多葉古等のひく字とて通用し又誤りて莨菪を以てあは
 せりてくさひおほし煙草の名は始て姚旅が露書といふ
 色のよ見ゆといへる叔錦里先生の考は此名を李太白の想
 思草如煙といふ句より出たるを云ふあり醫書も本草洞
 詮といふ書より始て煙艸の名を出せり其書は渡りて後を
 雅俗とも皆此文字を通用する事となりたり叔其書は能く
 功と害とを辨せり猶其前後の諸書も詳にこれを説き示せり
 も亦少なかりしに
 李氏の食物本草綱目は傳來の説を載せていらく彼より南よ
 りてくる海外は鬼國といふやの國あり其地ありて病者

ありてあつてなれりゆく時ハのそこのようきひのせて深山に捨るあり
そしなりを昔其國一人の婦女ありて重き病ひをまづひ
しを例のまづ山の奥にわきまをて人々立歸るぬ其婦女夢ら
のおとくありしうちえなれぬ香のあけるまづは忽ちちをりきて
あつてを見つるよいまど見えぬ草生ひあげるとりはひよあり
るれを嗅よまなまち身のうち清くまづやうは覺え今まはあ
病まをさき居ありしは夢の覺ゆるおとく一身まゑやうに
あつてよくありしれを己なやりる中まはあは捨られし事まを
りてさつとて扱をてりまをさ下りて我家に歸るぬ家ある人々
あつての物語をきとてそのいひありき薬なりとてやう

其草を得て世に傳へしが即ちまをさつとてりしれ假に作る
説を取ふとて又同じき別説は南蛮國一人の婦女あり
名を淡婆姑といふ數年痰の疾を患へしを此草を服して
全く瘳る事を得るとりしれなり此草を淡婆姑と呼ぶといへ
思ふよこれとてこの字音を填へ字面女はは婆姑といふ二字
ありまより女の名なりと附會し設けまを妾説なり
和蘭の書よよきて萬國の事をかんがはれし此の北の地あり
洲といふ世界は「タバゴ」といふ小島あり其地は生出し草なるを
貳百十餘年の昔ありしとて世界なる某の洲はココツトと
いふ人其島の産をとり出し携て其國に歸り移しとて始りて

夫より其世界は傳へあきよりして東の方。わづらひといふ世界も
傳へつひは其内は属せる東の又つらぐく其の國ともはるこくへも
傳へり數年たつて今ハ世界のうきうき西ハ東ハ南北のまじりて
よむはるあり國の内地ハさうありはる属せる遠近大小の島々と
いづともあきを用ひざるものもあく名ハ皆たふこと稱せりといふ
られど此の傳来の的證なりける

扱わんと近くの國々も煙を吹て樂とたせし習りも同くさぬ
なれども漸々草の性味を考へ其醫書の中ハ内より服し外より
用ひて種々の經驗を取る諸方法もおほく其方法或ハ青汁を
えぼり取り或ハ油とり灰とり或ハ塩精を取て用ひ或ハ鼻煙

とく一味粗末とわけて鼻より嗅て頭腦なる病を除き又諸方
劑ハ配合せ諸病ハ充て用ふるもの少なきは今こそを知るハ
此書編集の功と新譯の成りとも因るなり今始る薬功
ある事もわけて世に遍く蔓延常用のものとなりし上ハ又別
それくの製法を施して醫療も廣く用ひし事ぞう

考證雜話

此邦ハ此物の種を傳へて慶長十年乙巳にして肥前長崎櫻の
馬場ニ始て植つけしといひ扱醫官坂上池院の家ハ慶長年間の
私記數卷のりて今ハ傳來を其慶長十二年の條ハ云々此項た
むこといふものもあきハ南蠻より渡るといふは葉をきば

右舊記のごとく、當時鐵煙管を人を打川爲に設け置し、
あれを却て人をきせるものといふ和語ゆてもある所なきは但し
これ亦的證をなすべし

關東中思ひきせるといふことよりみせるは、あつた負ハせるの
義の如く他は物をあつたかけるをわするの意もあつた長崎の詞打
あつたをきき醒々の考は羅山文集に曰當時ハ葉を刻紙貼
しあつたを捲て火を吹き其煙を吸ひ其後ハきせるを用ひて紙貼
きせるの製或は鋤を用ひ或は竹を用ひて盛るものを鋤を以て
作る半翠花の形のおと見えしより考ふれば、竹は鋤の
類をきせてはくもるゆゑきせらうといひしは、きせると呼ぶは、
あつたといふより竹の事正編に詳あり其項のつげの鐵管もあつた
巻くこと等もあつたは、これより形あるを時の詞ゆてきせらうとも
いひしは、あつたも今のききせるも唐土より渡せるものなれば、
様もききせるといふべきは、これ又一考となすべし

又煙管と野作の詞ゆてきせらうといふ、木のほらつけの長さ

このふてきせるの形を、上下孔を貫く其名義詳にきせらう
扱奥州民間にて煙脂をせると呼ぶ是亦何の謂をあるこ
とをきせらうといふ、きせらうといふ義ゆて鑿と探るの意ある
然らう煙脂の筒中溜をせると出たものゆゑきせらうといふ
なるべし、夷言のせもんがうもあるは、きせらうといふの、
和語の棒杖なるゆゑ
正編中煙草のつげなる事盡く載せて遺漏なきがごとく、唯古来
通稱のきせるの名義未だ正しき證を得ざるを恨む、後の識者を待たむ
扱きせるを織田信雄の時分はやく今の世の製の如きものなり、
と見ゆ、あつた友人の方より示せし者あり、あつたハ浮世又兵衛が

画えがき六枚屏風の人物の傍そばに煙管の圖ずなりと 摸圖下もつづ げ

此浮世又兵衛が父ハ荒木某とひて云々本名を改めて母方の苗字を名乗若佐と稱せ成長の後信雄は仕へ浮世繪を画き出し遂に妙手となりと名譽を得たり故に世に浮世又兵衛と稱せり
但後の人又兵衛が名をみどりより浮世又兵衛と稱せり
繪の鑒定はゆるぎなく人の贈りしものをしるす

落穂集おち へ曰い文ぶん道どう寺じ交こう山さん寛かん我等われら善年ぜんねんの項こう或ある老人らうじんの物語仕候ものがたり つかう

たむこと申まうすもの古来無ふるく む之候つかう處ところ天正年てんしょうねん中南蠻人なんばんじんの入来いらい

項こうより世よは廣ひろまり初はじまりと申まうすあり然しかも元来南蠻國げんらいなんばんこくの土産みやげの

草くさ杯はいふても可有これあぶく之候つかう哉や以前いぜんの儀ぎ煙管きび杯はい張はる細工さいく人もあは

候つかう故ゆゑ直段ちかたん等らもむつと未すくの者ものハ求もとり申まうす儀ぎも成兼なりゆき侯つかう付つ竹たけ

の筒つつの先さきはゆを先さき大おほ穴あなとけ先さきのお火ひ皿ざらは用もちひてたむこと

つぎ吸申すひまじ候つかうもの其そのもは西國さいこくより出い出い中國ちゆうごく五畿内ごきないまで

も專もらと申まうす申まうす候つかう得え共とも關東筋かんとうすぢは於おて煙草えんそうを給たま候つかうと申まうす義ぎと

誰たれも存ぞんせ候つかう所ところの程ほどゆる段々だんぜんと申まうす出い出いせざるを仕つかうる細工さいく

人ひとなども多く成なり候つかうを以もつて竹たけの筒つつ煙管きびも申まうす物ものも申まうす候つかう

件けんの老人らうじん物語ものがたり仕つかう事こと小侯然せうこうぜんと申まうすこと初はじり申まうす

さの久敷事ひさしきことの様ようも不被存ふたふぞん候つかう云い云い

静廬せいろうが藏本ざうほん百物語ひゃくものがたり卷まき之下のげ九くある人ひとたむことをり此こ人のひとのこと

たむこと十損じゅうそんの歌うたをよめりしこのよめりし

其歌そのうたよめり云い云い一二三いちにさんの字じをわらは取とりて 其第十首そのじゅうしゆの哥うた

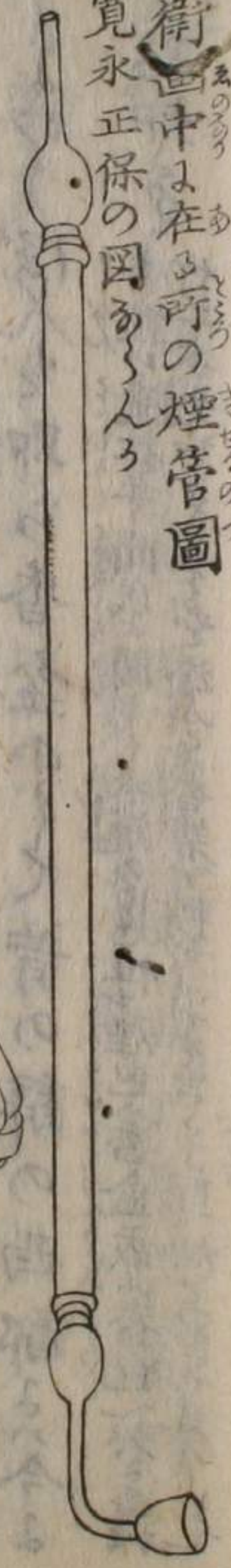
十じゅう人のひとのことハありてのむらたむことあはさるはくさるは

寛永の頃主佐
光益が画きたる
おとこせきさか
うむろよ長
煙管を持せ
るる圖



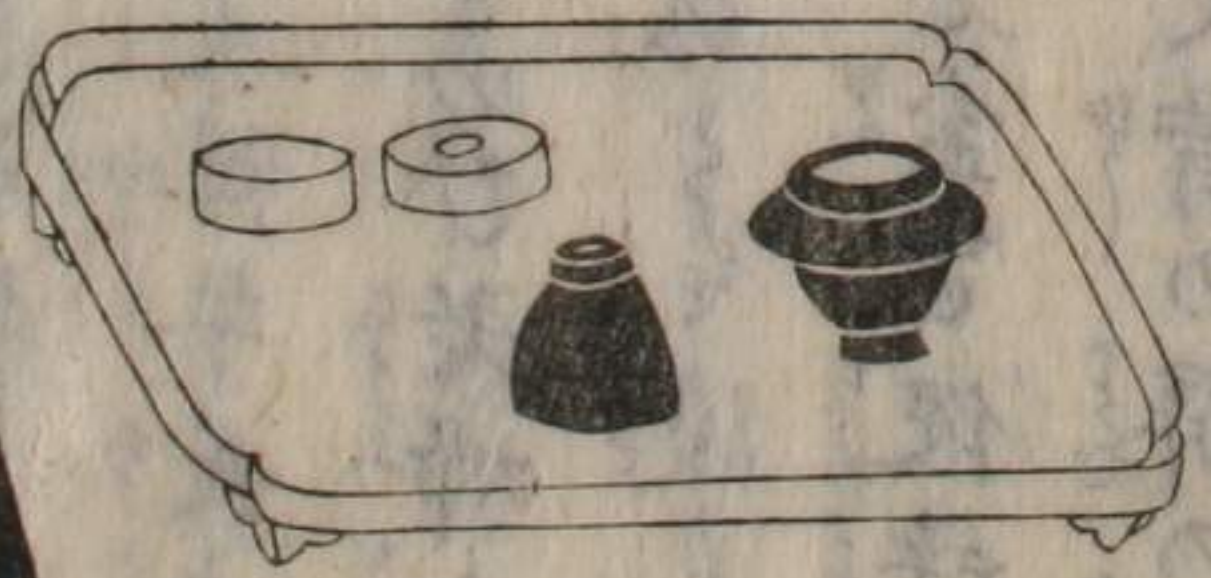
寛永の頃入々長煙管を
用ひ外出の時ハ奴僕は
持せり其頃の人錢湯
風呂入りと歸るるを
画きしもの此図なり其僕従
のど抜くあゝ摸を但一髪のみれりハ
其頃入湯の時ハ女をあらぬが故なりとぞ

浮世又兵衛
按は寛永正保の図ありん



寛永の未用たる煙盆の
模圖

按は香盆ありん



羽州山形民間に傳る所二百餘年前の鐵煙管
長曲尺壹尺一寸八分 重五十目



按は慶長松記西鶴本に出る皮袴組等の
男達下部に持せり斯のあしき
煙管ありん
此處ハ煙包を附る孔のふけり

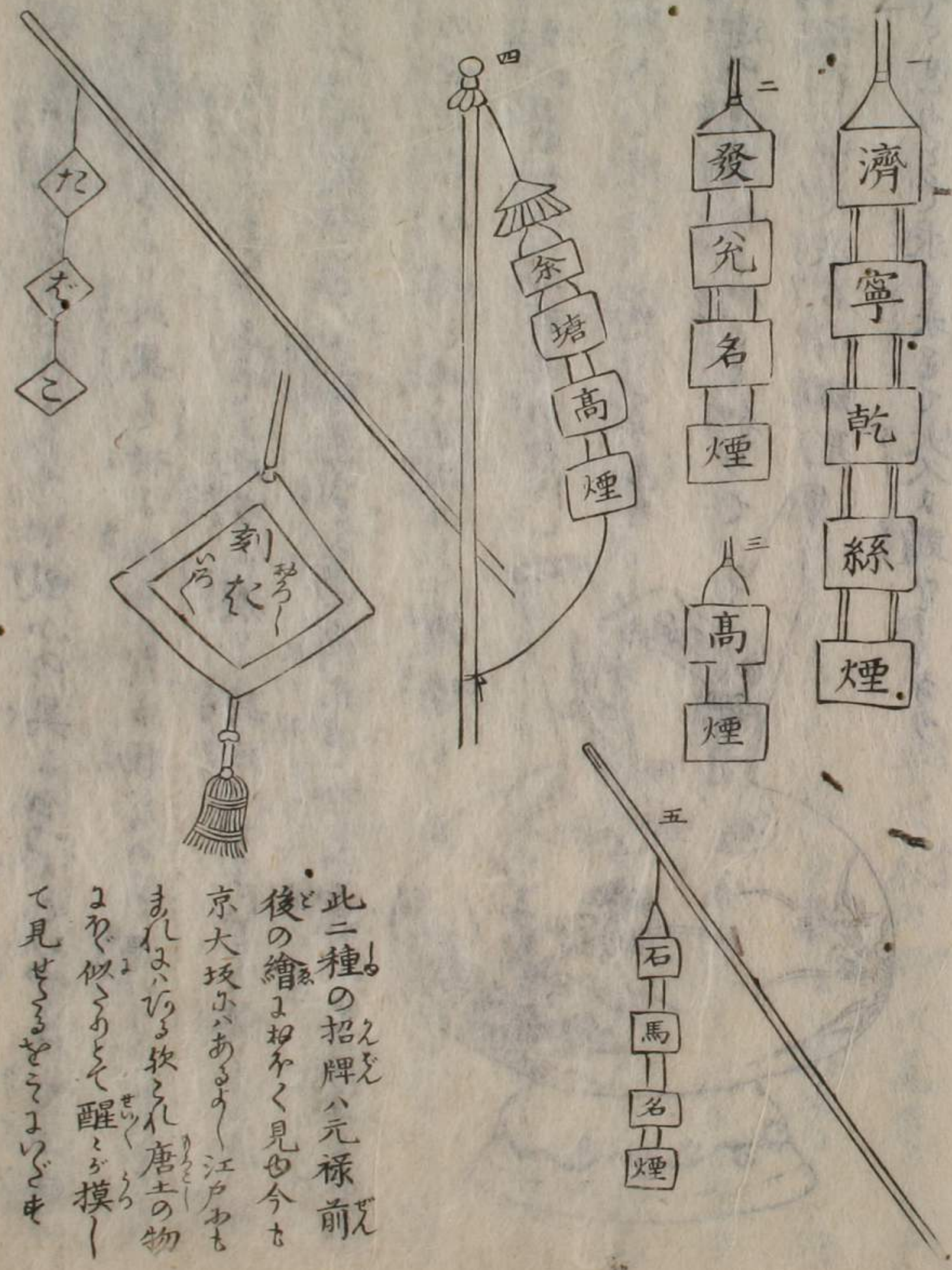
何れにぞとやう千萬なり著一亭主頭後ろ老人の相や方あまを
たむこの光と有てもとぞとてのまは其頃うらまきや門こと
とぞと人も六やううむとてがいをはる人もりんぎんのぎしき
又ハ相やう老人の前ゆてとぞこのむ人なりとぞと入をとり取
おとしても私のゆてハ無之とりゆてからを事あり一其頃のま
ハハのひハ青あま紙をとり又吹き画墨流しあどしとる
随分鹿相なるとぞと入なり一は今を金入の切とぞとあちん
色々のささ黒塗高時繪梨地をどしして自慢げは指出は
夫故とぞと入賣る事影一

近頃輪池屋代氏より自ら萱菴小言と題せる寫本一冊を借

與一より其書中よ説く所を見とて延寶天和貞享の頃の隨筆
小て盡く流行出せし煙草を憎む諸説なり堅くあまを廢せ
るべきの憤激の雜論數十葉綴り成せるものなりあまを
是違なくてをみし品のむゆまゆて云く且始ての習小人又
其性よゆとるもの酔ひ仆とるなどを見て甚どゆらみ
遠きけしなるも
又南畝太田氏の藏書印本愛煙草詩歌と題せる一書を見
る元禄四年宮本氏某の撰なり前書は反して煙草ハ閑居
茅窓は伴ひ風雅の遊情をたむるものとしてあまを愛翫し
自ら樂む詩歌なる何とてゆく愛憎の相反も其好む

蓋露頭黃二黃等の名有益露ととも葉のこも聞ゆ刻とを
 と縹煙縹煙乾縹煙又金縹煙など呼べと聞の地は植とを始
 として其後四方は遍く尤あを佳品とて燕産あれは次ぎ
 浙江石門を下り又浦城建煙清寧余塘石馬などいつるを
 其名産と見えて長崎へ持渡して縹煙の包紙と見えたり
 大人の親しく見らるるを
 壹斤角包小くももの如く味を強くと又ある書の中は煙舗
 の招牌くわんぱんも名産の名を記せり

和漢煙舗招牌の圖



此二種の招牌は元禄前
 後の繪は相なく見ゆ今も
 京大坂にありて江戸も
 まれにありて牧とれ唐土の物
 より似たりとて醒と摸
 て見せしむるやいふと

あまよ於て大人の不學文盲なる愚夫愚婦までも諭し示さんとせし
深情の本意を知る事の稀あるも亦遺憾とゆふを夫此物ハ其
功と害の相半なる物なるを以て世の人々をして貴賤を分るる心と
用ひ過服さるる様をそれくの的證を引きて新ハ八害の
説を立て痛く戒給ひしなりさるるも年々かく盛は行きて皆
人の口腹もよく馴れ染るる事故今昔のさゆゆも似む古人の
深く戒免且惡とぬる程もゆるぬゆ扱味曾やど煙毒を解む
そのをなると先輩もゆるるも今も試みて知る所あり幸ひは我國
の人ぞ朝夕は此物を飯食は添へ食へる故ハ覺えばあを解毒を
する事なるべしとて西北よりくる島の人ハ殊さるるあをを

好む愛せるとあはれながらは樂とてあををとりて其の
るをあををそれバ寒湿の氣を避けぬべき故ありされバ
雨風をも侵しあをを浪をもあををて漁る魚をもて此乾葉と
する事とぞかの長城を越えて西よりくる韃靼蒙古の境
ゆく支那より送る交易の品々の中にも此煙草第一の物也又東
北の野作人などハ煙草を喜ぶこと甚し珍しき品を贈らるるあり
少しの煙草葉を与へらるるを殊に喜びて米穀はむとるもさるる
然るは今も餘考中ハ深く戒め論し置るるのそのありまどく
又卒らる改めらるるもさるるもとよりありし人々よく其源を辨へ知る
頻るは用ひ過む事を用心し又短管を用ふるもさるるも時々

あまをさう之改りて新とよなり煙脂多きものを用ひざる
やうな心けよ尤我家に在るときも長き管なるを用ひよと
の戒を守るべしこれ皆吸くもの論なりこれよつきて
圖らばも詳に開け出し生乾草の藥功ある事あり世に
こそよまらんそまじくの製法を加へ新に病小施し用ひあむ

あま古よなき所の一箇の藥草起りたりとぞいひべき

本朝食鑑は日胸膈を通し胃口を開き鬱を拂ひ悶を破り
憂を消し飽るを解き齒牙を固くし二便を通し能一身の
氣をしくことを上下しことを運轉しことを發散せしむ
煙氣ハ聚るを薰灼の毒あり散らばハ又發達して其痕な

今世の人々ありを吸ひて煙を吐く漸く咽喉の間よりあり
胃口までも至らば出て出つ若し遺る薰るありとも湯
水も味噌汁をのまば悉く下は降るて去る盡るあま故に氣
と火の負け勝ちの害を受むとぞ

和蘭煙草の主治

粘液濁飲を疏利する事を主る藥局中ありおほくの製法
を施して諸病に用ふるものありその傳來の始ハあまの唯
歩卒役夫の葷勞疲飢渴の時よりあり一吸むきて暫時
快きことを取らるるものなりとぞ

按は東方の諸國よて今もいづは朝夕あまの事をもあれども
彼國ハ此草の本性を考へて藥治は専ら用ふること左のごとく也

煙草を性酷烈油氣と塩氣の多きを吐下の峻劑なり癩
及癰瘰不仁或ハ暈倒昏冒或ハ上氣或ハ呼吸急迫等の症を
主治也又水銃方藥中小もこを入も用小又艱ぐとき嘔吐を
止む一切の創傷浸淫惡瘡等凡此物外科方中は配合る
ものも急を緩免痰腐を除く等の事わきて効あり
此物の功をあらわし全く製法の塩と油より一體胸膈の痰滯を疏
通せ惣て諸惡液内は蓄て諸症を生ずる者これと服して
甚効あり

葉の味苛く嘗も舌頭をちみてさしやが如き辛烈きものを
擇ひ取もて藥用とあせべし其主治ハ急を緩免痰を除く
能く金瘡を愈せ或ハ其瘡久しく愈えど變トて翻花をお
も者或ハ墜墮撲傷或ハ蟲獸螫傷するもの又ハ上氣面赤
眼目翳膜の諸症又殺蟲功もあり

風寒に属する頭痛或も手足疼痛症中葉を取炙りて
其痛所は一ニ遍も置を甚効あり 齒痛中葉青汁を取
布巾に浸し其蝕痛の所は置き或ハ細末とあし傳けても亦
よし 金創諸部は被るもの小し久しく治しごとものよ
りききて効ありあせをつんとする前は先酒り小便を以て患
處を洗ひ細布を以て血を拭ひ淨くしてあせを注ぐ
胃虚して水穀消化がらき者又生稟胃氣弱る者此物一二

葉を取て火よりの阿禮襪油あらいばくあぶらと和し能研よく合せ腹の上胃の
部位ぶいに置おを大い功あり又解毒劑げどくざいともなるをひひ毒箭どくやよ
中ちゆうに血逆ちゆうはくを出て止とざるものよよ斯かくのごとき功あり故ゆに軍
陣じんに出る時ときに此青汁あせうじゆを器物うつはに貯たくわへて持行き其不慮ふりょの備ひと
なるも一青汁あせうじゆを乾葉くわんえつを用もちるも亦可なり

葉厚あつき物と擇えらひ取とり石臼いしうすに入いれ杵きねして其汁じゆを取とり腹の
上脾いの臟ざうの部位ぶいに按おを脾いの固結くこまう諸症しよしやうを融解とくかいせ或あるは
細末さいまとなしなししはるももよく或あるは膏かうととかりかりられられと貼てるも亦佳よきに
胃痛いひ疝瘕せんがい其餘いそ寒さむは属ぞくする者もの或あるは風氣ふうきを帶おぶる者もの此葉このえを
温あめて其患い上うにおけを諸痛しよつう速すみに退ひくなりなりられられハ屢試るんして

葉を取とる

關節疼痛諸症くわんせつしやうつうしやうしよしやう毎朝食前まいあけまへ一い二葉にを

嚙かむむ粘唾ねんたを吐はて其患い即すなち除はく大飲飽食おほい腹脹はらふ満みる

者二葉このにを取とり熱灰あつを其内うちに包つつみ暫しばく其氣きを透徹とうてつし

免是まを腹の上はらの上におけを其脹はらふ即すなち解とく葉このえを石臼いしうす小こく

杵きねを中ちゆうにおけを漉こし過すし乳汁ちゆうじゆと砂糖さとうとをく加くへ水銃注みづじゆう肛方くわうに用もちゆ

冬月ふゆづき小兒こども腫はれ蠶蝕さかをののつけつけ極きよくめて効きあり刀創たうじゆう骨ほねは透とる

者ものああを施せし數日あま小こして能肌たみを生はししきき口くちを飲のみむ

諸潰瘍しよさい蟲むしを生はする者もの此汁このじゆを塗ぬるる速すみに去はるなり金創きんじゆう

未まご日ひを經へぎ其毒どくも深ふかくくるもの此汁このじゆと渣くずとを取とり患處いに

塗ぬるる忽たちち愈よむ若わく其毒どく深ふかくくるものハ先酒まづを以もて其内うちに

注ぎ入る此汁を棉布に浸して創を覆一む日ならずいで
全く治む充創の内外を淨らちよを盡し

乾葉も亦其功用少く留飲の諸症ゆを其よく乾きし
物を取きて細末とす香爐の内よ於て焚き其上に轉注の

受く此のおくまれば夥しく粘痰宿水を吐出して即ち愈也
又水腫を療むる中を前法の如く小して唯ち愈也

覆む病者口を開きて直よ其煙を吞め水氣よく消るあり
子癩の疔此草を以て兩股横骨の邊を薰せ其苦を止む

乾葉を粗末とす火を點し鼻より嗅ぐものを鼻煙と名く

其功甚多し殊よ能く腦髓閉塞を開き嚏を發して其
蓄の所の痰物を瀉出せし故よ感冒頭風等常よ用ひ

て速功を得るなり人々盒子に貯て常よ備ふべし
又頭痛を治むる中此草を嚙み一箇の煙を吸ふ間小して其痛

を除く葉を杵き爛らし諸腫瘍に貼まを則よく膿熟を
綠葉を取て蒸露罐にて蒸して其露水をとりあをせ

硝子鑊の内よ貯へ置金瘡或を腫瘍あるひ冬月跟腫爪
甲指腫るものよ此油を棉布に浸し患處を覆へを忽ち

愈ゆるなり又此物を取て膏藥を製せし其功前よ
説く所の生汁一味を用るものよゆをるるよ勝るなり今

あつよ出し示せ

煙葉

潤大色青緑
臍氣のものを

九拾六錢

葉ごとし布巾を以て汚れつきし砂土等を拭ひ浄らし木臼

の内小て杵きしをらりし水を加つて其青汁を取し右量目

程の内よ家猪脂交じり混ざる筋膜等の四拾八錢を和しよく拌ぜ

あつよを銅鍋よ入し微火小て煎煉し水氣盡き宜きを得る

硬さよなめするを度とせ

此方ハ主治金瘡或ハ潰瘍若痔癰疽等諸般の患瘡ハ貼し能
汚を清くし急を緩し痛を和らげ肌を生む又他の膏藥
方中よ合せ

溺死を救ふ法

近頃溺死を救ふ簡便方を得る此患ともされ救ひごとし此

術開けて後死を免るもの多しと云ふ其法ハ即大頭の長煙管

を用ひ縷煙を盛し火を點し其火頭を口よ含て其煙を肛門

よ吹入し腸中よ吹入しなり再三あつよを吹あし第四五度よ至て口をい

よ含めたる煙を一氣よ吹入るかくのあつよを腸中雷鳴を

程なく口より水を吐出し但其水ハ僅しして腹脹乍ち減消し

て回生なりをよあつよ溺死の人のゆる水ハさつよは食道胃口の間に

あつよのあつよ然もとも呼吸の常道を壅閉るを以吸氣下よ推

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

送る事なきもあつよ氣息をさつよ胃と腸の間にあつよあつよ

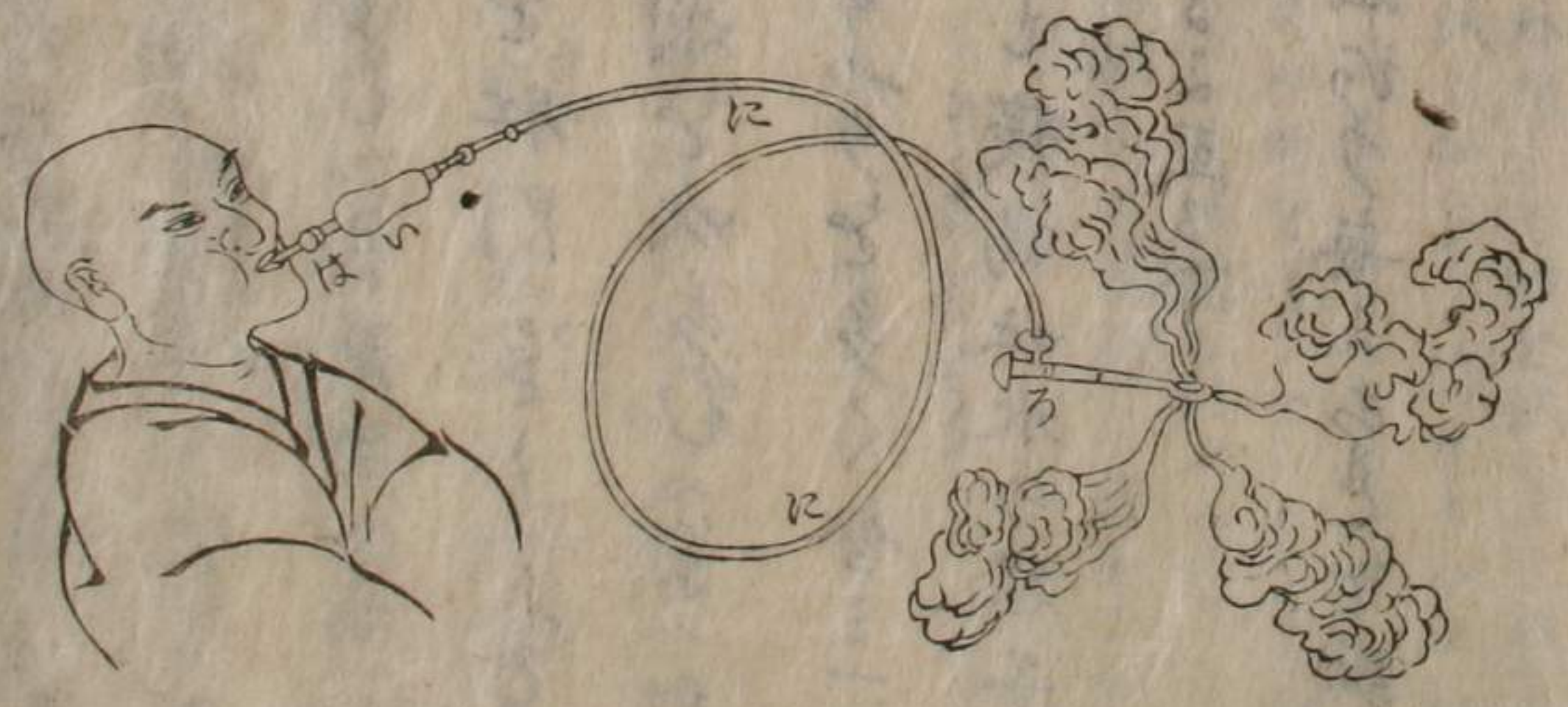
全く腹内は水の充滿するを以て此の吹煙法ハ煙草の辛辣
 氣を以て其腸中を刺戟し従て能く收斂し且其氣下膜
 の諸筋及胃腑腸膜を連及んで腸中自然の動機を促し
 催さしむるよめて胸膈を寬豁し呼吸を復せしむるあり
 此療法近世第一良書より新譯せるものあり叔注肛水銃導法の
 一法は直腸吹煙の器あり此を便秘の症に施す法あり其方術も器具
 も及んで其用を待たざるを尚便利ありし
 を作して其用を待たざるを尚便利ありし

肛門より煙を吹く器の圖

此圖ハ他の療法にて煙草の煙を肛門より吹く器なり
 阿蘭陀小使も常用の磁器長煙管を用ひしを急卒の

間は合なるべし此邦のきせきよは
 火頭小さく管も短く且口のき
 小もたへざるべし常は此器を造り
 備へ置るを便するべしとせし
 ちち赤らば摸せり時臨で
 此器を用ふを貴人婦人と
 いへとも其下體を全く露はさしめ
 るしそその術を施すも便利あり

△造法ありびよ用ひし



①印ハ鐵或ハ銅にて阿蘭陀煙管の大火頭のおとくはらる。其内ハ刺たをこを盛り火を点す辛くして強きに印をその火皿の底に接する草ゆて作らるたむむぎ長筒あり②印の象牙の小管に接す即此牙管を肛門にさし入ると上の③印の火さしよつけし小管より烟を吹あむなり其吹くくを先一をん吹入ると二度目ハより多く含み一はきよ強く吹あむなりをむしりても腹鳴吐水の容子あり時ハ又右のおとく吹くみ其効を見るよ至るべし又喘息病ハ煙草青葉修合の一良法なり毎にあをを試るに極えて効ありあをを略せしむ

此等の譯説皆生草或ハ乾葉を取て内服外用して功を試みるの方法ありあは常用の薫煙の外の事にして和漢のゆゑと試み知らざる所なり今此新試の譯説を見るときハ人々日夜の薫灼をせし尤心を用ふべきことありさて此草本来其主療を詳し辨し醫俗を論せむ自ら試みて其功用を尋うせむ無益の異州とも云へり殊々今に至る世ハ影々有觸るものにて諸國の村里ははりて得やをく且なりやをき便法あり又前法の外にも彼國嗣出の藥局方書中ハ數々の方法も見やれハ志あり人ハ尋求てよ

唐土吃煙の功能

煙草の味ハ辛く氣ハ温かくて性ハ毒ありあをを吃ハ寒と温とより發する痺を治し胸中の痞隔と痰の塞を消し経絡の結滯をゆるく其專らある功ハ四ツあり一ツハ醒れハ能あをを酔しむあはハその火氣薫蒸して表裏皆通徹し酒をのめる如くあれハなるも二ツやを酔ハよく是を醒せあはハ酒後ハ啜ハ氣を寛し痰を

下さか餘あま醉ま頰ほは解かを三さんツつあを飢うを能よくあを飽あしめ四よツつあを飽あくときハはららを飢うゑゑ又また空腹くうふくの時ときあを飽あくく充ち然ぜん氣き盛さかりり飽あくく飽あて後あとあを飽あくく則すなはち飲食おんじも快たく消しょうしやし也や也や

又またあれを吸あへへ頭目かぶを利きし風邪ふうじゃを解かし惡氣あくきを逐おひ百病ひやくびやうを去さる身みを強つよく健すこよよ也や △煙えん脂じ 能よ蛇毒さどくを解かす

按あじ試しええ煙脂えんじ少許せうこを取とり蛇口へびぐちに入いれれ其脂そのじの氣き其身そのみはああららりり次弟つぎは肉にくの色いろ衰おとろへへつつひひももららみみああららりり死しするるなりり又また蛭むしの人の身ひとのみはつつききくくももととめめれれがが忽たちちちをを死しすす農夫のうと泥田ぬいでんに入いるる者もの蛭むしの取とりりととききんんととするるものハは脛すねは二に三さんテテ所脂ところじををめめししてて入いれれをを必かならずずりりつつくく事ことなりりとと云いふ

門かど吉士きちしののととるる此物このものの功こうはるるももげげを氣きの甚しつ辛しん烈れつ故ゆゑは火かを得えて燃もし其煙氣そのえんきを吸あひ其氣そのき喉中のどちゆうは入いるるは大おほく能よく霜露しもつゆ風雨ふうう

の寒ふせを禦よぎ山さん蠱こ鬼き邪じゃの氣きを避さく小兒せうじあを飽あくくのめを疳積かんせきを殺ころし婦人ふじん此このをのええ能よく癥瘕しやうがいを消しょうす氣滯きせ痰滯たんせ一切いっけつ寒ふせ疑ぎ不通ふつうの病びやうはるるもの此このを吸あへへ即すなはち通とむ也や 又一書またひとしよは能よく瘴氣しやうきを解かし最霧さいむ濕しつを消しょうす其霧そのむ濕しつの毒どくととふふもの海うみは起おこる山瘴さんしやうの氣きハ山さんは盛さかなり其盛そのさかは行いく所ところはてを此煙草このえんそうの藥勢やくせい火かの力ちからを借かり行いく事ことなり如斯かく辛しんき味あじのものハ先肺臟せんはいざうは入いる遍あまく経絡けいらくは走はしる故ゆゑは微風みかぜ暴寒ぼうかんを立たてては吹ふき散ちるべし又能また強つよて榮衛えいゑを行いく驟あつに閉とむ塞さいを開ひらく寒ふせなる者ものハ暫しばく熱あつせし免飢めんきるものもこれをして暫しばく飽あくく免倦めんけんる者ものハあを飽あくくして暫しばく健すこなりし車くるまは

必也氣力を耗ら^へく知覺を失^きふといつり

一書此物過服^{ひすぎ}せむ必也害^{あや}なり記臆意識^{きおくいしき}を損^こへ或^{ある}ハ昏憤眩^{こんべんげん}

暈^{うん}を發^はせあるハ他の故^{ゆゑ}あり能^{あた}く神經^{しんけい}を透徹^{てうてつ}して真

氣を耗^へ消^{しょう}せを以てなる世人は省^{ちか}めて常用^{じょうよう}のものと

なり暫^{しば}くも手と口とを離^{はな}して余^{あま}を以て思^{おも}ふ恐^{おそ}くハ強壯

なる者^{もの}としく怯弱^{けつじやく}なり久^{ひさ}遠^{とほ}なり其天年^{てんねん}を去^さぐむる

なり人^{ひと}攝生^{しやくせい}の人より省^{ちか}め思^{おも}ふを

此餘和蘭の諸説大同小異正編に盡せりあるは薰煙の過服を戒むるを漢説と相似て又實理の精を加ふるものなりよくよく考ふべし

目とまゝ一草終

清中^{せいちゆう}多^{おほ}主人^{しゆじん}之^の病^{びやう}多^{おほ}し記^き考^{こう}多^{おほ}し

附^つ錄^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

附^つ録^{りやく}一本^{いっぺん}清^{せい}と梓^し名^な心^{しん}是^{こゝ}ら正^{せい}編^{へん}に

言及近海家滿十才之刊出也
以余之見之亦世之所謂也
之一端也其子之心亦教海托持
以之也

碧里拙生頌

友人寶唐忘之

書



